

デーリウス『僕が世界チャンピオンになった日曜日』試論  
— 神の檻からの解放, 牧師館の息子が駆け抜けた思想史のドラマ —

木本 伸

はじめに (作品の要約)

本論は F.C.デーリウス『僕が世界チャンピオンになった日曜日』の作品解釈を行う。作者のデーリウスは社会派の論客として知られている。ドイツ赤軍(RAF)による「ドイツの秋」(Deutscher Herbst)に取材した三部作『国家安全保障の英雄』(Ein Held der inneren Sicherheit, 1981), 『モガディシオ窓際席』(Mogadischu Fensterplatz, 1987), 『国家反逆者の昇天』(Himmelfahrt eines Staatsfeindes, 1992), あるいはベルリンのオーケストラ団員がテルアビブのホテルで戯れに AH(Adolf Hitler)と署名して国家間の大問題を引き起こす『トレモロ』(Die Flatterzunge, 1999)など, その作品は大きな社会的議論を巻き起こしてきた。そのため本作が発表されたときも, もっぱらドイツ現代史の枠内で作品を理解しようとする論調が強かった。<sup>1)</sup> これはデーリウスに限らず, 社会問題に積極的に言及する作家に対する風潮と言えるだろう。<sup>2)</sup>

たしかに, この作品には冷戦時のドイツ分断が色濃く反映している。<sup>3)</sup> またナチス時代の気分を残す庶民感覚も描かれている。<sup>4)</sup> だが現代史の関心だけでは汲み取れない問題が扱われていることも忘れてはならない。それは神を結節点とした近代文化の問題である。近代の作家たちは, それぞれに神の問題と格闘してきた。ここでデーリウスは自分の生い立ちを振り返りつつ, この問題に対する報告書を提出しているとも言えるだろう。本論では, このような視点からこの作品を読み直してみたい。

まずは物語の内容を要約しよう。作品の舞台はヘッセン州のヴェアダという実在の村。その牧師館の 11 才の少年が物語の主人公である。彼は古い修道院に由来するギムナジウムでラテン語を学んでいる。そして村の牧師である父と母, 2 階に同居する祖父母に見守られながら, 4 人兄弟の長男として育てられている。ここまで見てくると, もう厳格な牧師館の生活や古典的教養に押しつぶされそうな少年の姿が目につく。それは牧師の家庭を揺り籠として成育した近代ドイツ文学の戯画とも言えるだろう。<sup>5)</sup> この自伝的作品でデーリウスは, 彼自身も自国の文学的伝統に連なる者であることを告白したのである。<sup>6)</sup>

ただし, この作品には従来のドイツ文学にはない独自性がある。それを可能にしている

のが物語の日付である。1954年7月4日。それはベルンで開催されたサッカーワールドカップでドイツが初優勝をとげた日だ。このとき戦後ドイツは初めて国家的な高揚感にわき立った。敗戦により地へと落ちた自信が「俺たちも何がしかの者だ」(Wir sind wieder Wer.)という自尊感情を取りもどしたのである。<sup>7)</sup> そのうねりはキリスト教の伝統に守られてきた小さな村を襲う。主人公の少年も試合の実況放送を聴くことで勝利の歓びを共有する。それは古い価値観からの解放を意味する出来事だった。このような価値転換のドラマが一人称話者である少年の心象風景として描かれていくのである。

ワールドカップの勝利は高度経済成長の始まりを画する出来事だった。それは裏面では伝統的秩序の没落を予示していた。つまり決勝戦の日曜日は社会史と思想史が交差する稀有な一日だったのだ。このときまで主人公の少年は牧師館の長男として神の秩序の下で暮らしてきた。それは宗教が絶対的な権威だった中世を思わせる生活である。しかし彼の中では理性がまどろみ、神からの独立を夢見ていた。この独立の夢が劇的な一日の展開において実現するのである。だが理性の輝きは長くは続かない。理性が恣意的な欲望の手段となる醜悪な時代が待ち構えているからだ。このような数百年にわたる思想史の展開が一日の出来事において反復されていく。<sup>8)</sup> その過程を順に見ていこう。

## 朝の鐘

物語は日曜の朝に始まる。「僕が世界チャンピオンになった日曜日、それはいつもの日曜日のように始まった。」(Der Sonntag, an dem ich Weltmeister wurde, begann wie jeder Sonntag, S.7) このさりげない書き出しに続くのは、しかし、平穏な朝には似つかわしくない、すさまじい言葉の連続である。「教会の鐘は僕を叩き起こし、夢の中の幻を切り刻み、両方の鼓膜を殴りつけ、頭を金槌で打ちつけ、なすすべもなく壁際に向けた体を殴り倒した。」(die Glocken schlugen mich wach, zerhackten die Traumbilder, prügeln auf beide Trommelfelle, hämmerten durch den Kopf und droschen den Körper, der sich wehrlos zur Wand drehte. S.7) この目覚めの場面では、考えられる限り暴力的な言葉が使われている。まだ少年の体から一滴も血が流れてはいないのが不思議なほどだ。

たしかに教会の塔は「僕のベットからほんの数メートル」(Nur wenige Meter von meinem Bett, S.7)離れているだけだ。だが、それだけが鐘の威力の理由ではない。少年の観察によると、寝室を共有する弟は少しばかり朝の眠りを妨げられただけで、その後も眠り続けて

いる。不思議なことに教会の鐘は、村中のだれよりも少年のところに重い義務の念を呼び起こすのだ。

打ち付けるような音は村中と谷とまわりの森全体に響き渡っていたが、それは僕の耳だけに狙いをつけているようだった。(Obwohl sie [Tonschläge] das ganze Dorf, das Tal und die Wälder ringsum beschallten, schienen sie kein anderes Ziel zu haben als meine Ohren, S.7)

このことは主人公の少年が一家の長男であることと無関係ではない。同居する祖父母から見れば、彼は11人もの孫の初孫でもある。そのため少年は、つねに「模範であらねばならない」([mich], der Vorbild zu sein hatte, S.19)。教会の鐘は「まるで僕の頭の中から禁じられたことや柔弱な思いを力づくで突き飛ばそうとするかのように」(Als sollte mir etwas Verbotenes, etwas Zartes mit Gewalt aus dem Kopf gestoßen werden, S.7)鳴り響く。牧師館の生活は決まりだらけだ。彼は「このすべての決まりとからみあい、決まりに溶け込むように育ってきた」([weil ich] mit ihnen [alle diese Regeln] verwachsen, in sie hineingewachsen war. S.14)。

「巡査と泥棒」みたいな、納屋や道端や野原でみんなでやる遊びは禁止。部屋で遊ぶのは、だいじょうぶ。はしゃいだり言い争うのは禁止。(…)宿題は労働のひとつと見なされた。日曜の晩にラテン語の教科書にちらりと目を走らせるのもそうだ。神様が7日目にお休みになったのだから、労働は禁止だ。(Räuber und Gendarm und ähnliche Gruppenspiele in Scheunen, auf Straßen und Feldern waren verboten, Spiele in den Zimmern erlaubt, Toben und Streiten verboten, (...) Hausaufgaben zählten als Arbeit, selbst ein schneller Blick am Sonntagabend ins Lateinbuch, und Arbeit war verboten, weil Gott sich am siebten Tag erholt hatte, S.13f.)

こうした諸規則の根本にあるのが「祭日を聖なるものとせよ」(Du sollst den Feiertag heiligen! S.13)というモーセの戒めである。それは暗い教会よりも野原に誘われる子供には「責め苦の神」(Foltergott, S.58)の要求に他ならない。その苦しみは主人公の少年だけではなく、おそらく厳格なプロテスタントの規律のもとに育てられたドイツの子供たちに共通する経験だった。その傍証となるのが、この作品でも引用されている『鐘の逍遥』(Die

wandlende Glocke)というゲーテの詩である。日曜の鐘は、村人に教会に集まるように命じている。ところが子供は何とか野原へ逃れようとする。鐘なんかぶらさがっているだけで怖くはない、そう子供は考える。そして母親の言いつけも守らずに、教会に背を向けて歩き出す。すると「なんとおそろしいこと、後ろから！鐘が揺れながらやって来る。(…)哀れな子供は恐怖に包まれ、(…)鐘は子供を覆いつぶしてしまうだろう。」(Doch Welch ein Schrecken, hinterher! / Die Glocke kommt gewackelt. / (...) Das arme Kind im Schrecken, / (...) Die Glocke wird es decken.)<sup>9)</sup>

主人公の少年は国語の時間にこの詩を学ぶ。彼の教科書には「鐘が子供に落ちかかり、今にも覆いつくし、閉じ込めて叩きつぶし、窒息させようとする様子を描いた挿絵」(das Lesebuchbild, wie die Glocke über das Kind stürzt und kurz davor ist, es zu decken, einzusperren, zu zerschmettern oder ersticken, S.40)が示されていた。その挿絵に彼は自分を重ね合わせる。鐘に押しつぶされて今にも窒息しそうなのは、彼自身に他ならない。

解き放たれた鐘に追い立てられ責め立てられる子供の驚きと恐怖を僕は感じた。僕はこの詩がわかった。もしかしたら、この詩ほどわかる詩は他にはなかった。僕はこの詩を憎んだ。詩句や韻の背後によく知っている危険を認めた。僕はわが国の最大の詩人であるというこの詩人を呪った。この詩人が憐れな子供の恐怖を弄んでいたからだ。

(Ich fühlte die Überraschung, den Schrecken des Kindes, das von der Glocke, die sich losgemacht hat, verfolgt und gejagt wird, (...) ich verstand das Gedicht, verstand vielleicht kein Gedicht besser als dieses, ich haßte das Gedicht, sah hinter den Zeilen, den Reimen vertraute Gefahren. Ich verwünschte den Dichter, der unser größter Dichter sein sollte, weil er mit dem Schrecken des armen Kindes spielte. S.40f.)

教会の鐘を耳にするだけで、少年は生活の隅々まで張り巡らされた無数の決まりを思い出す。この鐘の響きは彼に、もはやどこにも逃げ場はないと告げているようだ。

## 神の目

これほどの責め苦を子供にもたらず感受性。それはドイツの文化的風土に養われたものだった。その中心に位置するのが神の観念だった。

日曜日は僕のためにあるのではなく、家族のためにあるのでもなく、父の上に君臨するあの髭面の父のためであった。(Der Sonntag war nicht für mich da oder für die Familie, sondern für jenen bärtigen Vater über dem Vater, S.15)

少年は、いつでも不可視の神に見られている。この「神の目」は「天のどこかにあり、すべてを見るが自らは見られることがなかった。」([das] Auge Gottes(...), das irgendwo im Himmel hing und alles sah und nicht gesehen wurde. S.15)

少年にとって神は抽象概念ではない。不可視の神が力を及ぼすのは、それが地上の権威によって体現されているからだ。かつて潜水艦の艦長だった祖父は、何よりも「現代の無信仰を恐れ、それと戦うのは聖書とフランクフルター・アルゲマイネと貴族新聞しかない」(und fürchtete [der Großvater] die Gottlosigkeit der modernen Zeit, gegen die nur die Heilige Schrift, die Frankfurter Allgemeine und das Adelsblatt halfen. S.24)と信じている。また牧師の妻として非の打ちどころのない母親は「敬虔な確信のまゆ」(im Kokon einer frommen Gewißheit S.45)のなかで安らっている。

もちろん最大の権威は父親である。たしかに説教壇から語りかけるときも「彼は聖なる傷痕を示すことはできないし、イエスその人でもなかった」(daß er keine Wundmale vorzuweisen hatte, kein Jesus, S.53)。それどころか「父の手からは結婚指輪が金色に輝いていた」(der Ehering golden aus der Hand glänzend, S.53)。しかし、「父は村のどこでも歓迎され、人々に耳を傾け、人々に語りかけた。」([den Vater,] der (...) fast überall willkommen war, den Leuten zuhörte und ihnen zusprach. S.32) 彼が「イエスの代理人」(sein Stellvertreter, S.53)であることを疑う人はいない。このような村と家庭にあって、主人公の少年は、いつでもどこにいても神を意識することになる。

神の目は父と母と祖父母の目に反映し、彼らの目は神の目を側面から支援し幾層倍にもし、こうして数え切れないほどの目が僕の上に注がれるのだった。(das Auge Gottes spiegelte sich in den Augen des Vaters, der Mutter, der Großeltern, ihre Augen flankierten und vervielfachten das Gottesauge, zu viele Augen sahen auf mich herab. S.15)

このように神の目にさらされることで、少年は、おのずとそれを内在化させていく。そ

して、いつのまにか彼自身が神の目で見られるようになるのである。

見るものすべてのうえに、信仰のかすみがかかっていた。僕はあるがままを見るのではなく、あるべきように見えていた。僕の視線は神の視線でゆがめられ、にごらされていた。(…)僕の目は僕目ではなく、ほとんど両親の見方が植えつけられた、あやつられた器官だった。(Auf allem, was zu sehen war, lag der Nebel des Glaubens, ich sah nicht, was war, sondern sah, was sein sollte, mein Blick war durch den Gottesblick verzerrt oder getrübt (...) meine Augen waren nicht meine Augen, sondern manipulierte Organe, in die zu viel von der Sichtweise der Eltern einoperiert war. S.72)

神の目による自己規制。それは北ヨーロッパのプロテスタンティズムに養われた地域において広く見られる現象だった。マックス・ヴェーバーによれば、宗教改革に由来する新教は「家庭生活と公的生活の全体にわたっておそろしくきびしく、また厄介な規律を要求するものだった。」<sup>10)</sup> 牧師の家庭では具体的な場面で、どのようにふるまうべきかだけでなく、どのように感じるべきかも定められていたのだ。その具体例を次に食事の場面に見てみよう。

## 食事の場面

牧師館の朝食にはパンが欠かせない。まず「食卓のまん中にはパン」(in der Mitte des Tisches das Brot, S.18)がある。それを家族みんなの「おはようの顔」(Gutenmorgengesichter, S.18)が取り巻いている。ある文章でヘッセは昨日に生まれ明日には消えていく無数の言葉とは異なり、パンはドイツ人にとって特別な響きを持つものだと述べている。さらに、それは日々の糧にとどまらず、最後の晩餐におけるイエス・キリストを比喻するものでもあると言う。<sup>11)</sup> たしかにパンという言葉には無限の広がりがあるのだろう。しかし宗教性の深みまで達するパンの語感も、教義の名において硬直化するならば、たちまち滋味あふれる豊かさを失うのではないだろうか。

牧師館においてパンは何よりもキリストを象徴するものだ。そもそも食事は「内なる瞑想」(eine innere Andacht, S.20)であり、そこで会食者は「聖霊の降臨」(den Anflug des Heiligen Geistes, S.21)を感じ取らねばならない。このような食卓では猥雑なおしゃべりなどは許さ

れない。なぜなら「食べてるときはしゃべってはいけないし、他の人が話すのを聞くときは自分は口を挟んではいけないから」(weil nicht sprechen sollte, wer kaute, weil nich sprechen sollte, wer einen andern sprechen hörte, S.73)だ。そもそも食事は始めに全員で手をつないで祈るところから、最後のアーメンまで厳密に儀式化されている。食卓に並んでいるのは、村の「食品購買組合」(im Edeka-Laden, S.66)で買われたものだが、そこに牧師一家は「(モーセとその民が)荒野をさまよったときの天国のパン」(das himmlische Brot beim Zug durch die Wüste. S.20)を認めるのだ。

パンは聖なるものだ。それは村のパン屋で焼かれたものだが、どの一斤にもキリストの祝福があった。どの一切れにも、パン切り器を回して切られたのではなく、まるでイエスその人が手ずから分けられたような奇跡が照り返していた。(Das Brot war heilig, auf jedem Laib, obwohl im Dorfbackhaus gebacken, lag der Segen des Heilands, auf jeder Scheibe, als sei sie nicht durch die Brotmaschine gekurbelt, sondern von Jesus persönlich gebrochen worden, der Widerschein des Wunders. S.20)

食事は楽しむものではなく教義を反復する機会に他ならない。このように生活が儀式化されることで、家族は素朴なつながりを失っていく。少年はこころの中で「どれほどパンが母親と自分を引き離し、母親を遠ざけているか」(wie das Brot uns trennte, wie der Abstand zu ihr wuchs, S.22)と訴える。だが儀式の進行に余念のない彼女には、その声はとどかない。

このような食卓に主人公の少年はうんざりしている。ただココアを口にするときだけ、彼は皮肉な安堵を覚える。なぜなら「イエスの時代にココアは知られていなかったし、どの祈りの言葉にも出てこない」([ich fand es erleichternd,] daß der Kakao zu Jesuszeiten unbekannt war und in keinem Gebet genannt wurde, S.21f.)からだ。

僕は熱帯地方の大農園に思いこがれた。神の恩寵で毒されていない食べ物だけの食事を夢見たのだ。(ich sehnte mich fort zu den Plantagen, träumte von einer Mahlzeit mit lauter Lebensmitteln, die nicht von Gottes Gnade vergiftet waren, S.22)

目の前の食事を味わうために、少年は遠い熱帯を空想しなければならない。現実を取り

もどすには、この村から遠ざかるしかないのだ。この戯画は人間を現実から背かせる宗教の巨大な力を示しているのだろう。だが南半球は遠すぎる。そこで物語の後半で、彼はささやかな散歩に出かけることになる。

## 啓蒙の季節

この日の午後、主人公の少年は父親の執務室でワールドカップ決勝戦の生放送を聴く許しを得ていた。しかし放送までは、まだ2時間もある。それまで牧師一家は昼寝の時間だ。11才の少年はもう午睡を強要されることはないが、そのあいだは物音を立ててはならない。この息苦しい「規則で定められた静けさ」([Vor] der verordneten Stille, S.80)にたえかねて、彼は野原へ飛び出す。外は天気だ。「屋外へ、雲の下のひばりのもとへ、夏へと」(hinaus an die Luft, unter die Lerchen unter den Wolken, hinaus in den Sommer, S.80), ころろははやる。目的の地は丘の上。なぜなら、そこには村を見下ろす高さがあるからだ。

高みに登るにつれて見下ろすという幸せが、自分の目で足下の小さな世界を秩序付けるという幸せな気持ちがあわき起こった。(…)規則だらけの家を見下ろすことで、僕は落ち着きを覚えた。(mit dem Aufstieg wuchs das Glück, hinabzuschauen und die kleine Welt da unten mit eigenen Augen zu ordnen. (...) es beruhigte mich, auf das Haus der Vorschriften (...) hinabzuschauen, S.82f.)

かつて遠くから畏怖されていた山々が競って征服されるようになったのは、近代の初頭のことである。そこには世界を高みから見下ろす喜びが与っていた。世界を視覚的に捉えることは、世界を支配することに他ならない。少年が登る小さな丘はアイガーやモンブランではない。だが、その高みが与える認識の働きは、名だたる山々を征服した登山家たちが勝ち得たものと大差なかっただろう。<sup>12)</sup> これまで物語の中で大人たちに監視されてきた少年は、この丘の場面で初めて見られるものから見るものへと立場を逆転させている。それは「すべてを見るが自らは決して見られない神の目」([das] Auge Gottes (...), das (...) alles sah und nicht gesehen wurde, S.15)を奪い取る経験だった。近代とは人間理性による神の地位の篡奪であると定義することができるなら、このとき少年の中で近代が成立したのだ。それは父＝神からのひとときの独立だった。

すべてがよかった。まるで両親と祖父母と小さな妹たちだけが眠っているのではなく、すべての人と家畜と家々と3つの城が、いばら姫の長い眠りについていてるように静かだった。(es war alles in Ordnung, es war still, als schliefen nicht nur meine Eltern und Großeltern und die kleinen Schwestern, als schliefen alle Menschen, das Vieh, die Häuser und drei Schlösser den Dornröschenschlaf. S.83)

世界は深い眠りに沈んでいる。ただ彼の目だけが世界を眺めている。そのまなざしには深い満足が感じられる。存在への然り。ここには創造の7日目の神の祝福に通じるものがないだろうか。この満足はさらに美的恍惚へと高揚する。

自分の目ですべてにふれて、それを美しいものとするのは、すばらしかった。

(Es tat gut, mit den Blicken alles zu berühren und zu verschönern, S.82)

この美的恍惚も、また近代の経験である。それは大地を思うままに開拓し、「時よ止まれ、おまえはあまりに美しい」(Verweile doch, du bist so schön)<sup>13)</sup>と叫んだファウストの喜びに通じているだろう。この美的経験において理性の展開は頂点に達する。しかし近代の思想史が示すように、理性の幸福は長くは続かない。理性が欲望の下僕となる時代が、すぐそこに待ち構えているからだ。まもなくベルンでは決勝戦が始まる。少年は山を下りていく。その下山は理性の没落を暗示しているのかもしれない。

## 決勝戦（宗教言語の解体）

1954年のワールドカップは戦後初めての大会だった。開催地にスイスが選ばれたのは戦争の被害が他国よりも小さかったためと言われている。ドイツは本大会出場を果たしたものの、とうてい上位進出を望める状況ではなかった。それに対して有力視されていたのがハンガリーである。魔法使いのマジヤール人と呼ばれたハンガリーチームは「4年半ものあいだ31試合も国際試合で負けたことがない偉大なる優勝候補」(den großen Favoriten, (...) der seit viereinhalb Jahren in einunddreißig Länderspielen nie bezwungen wurde. S.89)だった。予選リーグでの両者の戦いは8対3でハンガリーの圧勝。同じ組み合わせとなった決勝戦でも

ドイツに勝ち目はないと見られていた。それは主人公の少年が家庭の宗教的束縛から解放される見込みにも等しかっただろう。

外出からもどった少年は父親の執務室に向う。この家でラジオを聴けるのは、この部屋しかないからだ。ただし家族は、まだ眠っている。

僕は静かに聴かねばならない、それが条件だった。僕は椅子を受信機に引き寄せた。(Ich durfte nur leise hören, das war die Bedingung, ich rückte den Stuhl näher an das Gerät, S.88)

この用心は家族を起こさないためだけではない。そもそも執務室のラジオは教会放送かクラシック番組のためにある。今日だけはサッカー好きな少年のために特別な許可が与えられたが、そもそも牧師館でスポーツが話題になることはない。それは「現代の無神論」(die Gottlosigkeit der modernen Zeit, S.24)を予感させる信仰の敵なのだ。事実、試合に先立つ新聞のスポーツ欄の言い回しは彼をおどろかせる。

ドイツ代表が天国に突入する。この文章は2度目に読んだときも僕を苛立たせた。天国は信者と天使と神のものだ。(Deutsche Nationalelf will den Himmel stürmen. Der Satz irritierte mich auch bei der zweiten Lektüre, der Himmel war für die Frommen, die Engel und Gott, S.63f.)

少年は宗教言語を空気のように吸って育ってきた。その抑圧から逃れたい今でも、本来の語法を歪めるような使い方には反射的に抵抗を覚えてしまう。このような傾向を強めるのが執務室の調度である。ここには十字架やモーセの肖像などが重々しく飾られている。ここは「父の支配力の源泉である場所、そこから父が4つの村の信徒を統治していた場所」([ich blieb auf] dem Platz, von dem die väterliche Gewalt ausging, von dem aus er die Gemeinden in vier Dörfern regierte, S.96f.)である。「モーセの十戒が妥当する場所があるとすれば、それはここだった」(wenn die Zehn Gebote irgendwo galten, dann hier. S.95)。

ところが、この「神の部屋」(Gotteszimmer, S.94)の受信機からは前代未聞の言葉が流れてくる。それは世俗の耳には実況放送の決まり文句にすぎないが、初めてスポーツ番組を聴く少年の耳には、おどろくことばかりだ。まずアナウンサーはドイツの決勝進出を「サッカーの奇跡」(Fußballwunder, S.88)と呼ぶ。さらに試合が始まると、「祈る」(beten)、「信

じる」(glauben),「たすかった(神に感謝あれ)」(Gott sei Dank!)といった教会の語彙が、ふんだんに散りばめられる。こうしてスポーツの世界大会は地上を超越した出来事へと祭り上げられていくのだ。

アナウンサーが牧師や宗教の教師よりも情熱的に「信じる」という言葉を発することに僕はびっくりした。(ich staunte, daß der Reporter das Wort glauben mit mehr Inbrust als ein Pfarrer oder Religionslehrer aussprechen konnte. S.93)

まるで初めて不良少年の集まりに顔を出した優等生のように、彼は誘惑と反発のあいだを揺れ動く。そしてラジオから休みなく流れる語彙に圧倒されて、次第に「サッカーファンの共同体の中心へと」(mitten in die Gemeinde der Fußballanhänger, S.90)引き込まれていく。牧師の執務室は村の信仰の中心点である。そこでスタジアムで熱狂する現代の異教徒への改宗が行われていくのである。

試合は前半早々にハンガリーが2点を先取。しかしドイツも反撃して前半のうちに同点とする。その後は一進一退の攻防が続き、後半39分にドイツが決勝点をあげる。そうなるアナウンサーは絶叫の連続だ。ハンガリーの嵐のような攻撃をキーパーが防げば、「トゥレク,おまえは悪魔のようなやつだ,サッカーの神様だ」(Turek, du bist ein Teufelskerl! Turek, du bist ein Fußballgott! S.93)と叫ぶ。この「前代未聞の背徳的な礼拝,あるものが悪魔であり同時に神と呼ばれる異教徒のミサ」(ein lästerlicher, unerhörter Gottesdienst, eine heidnische Messe, in der einer gleichzeitig als Teufel und Gott angerufen wurde. S.93)に,少年は夢中になる。それにつれて部屋を飾るキリスト教の装飾が,彼の視界から消えていくのである。

壁の十字架はちぢこまり,神の幽霊たちは殴られたように動かなくなった。(…)あらゆる天使たちとモーセは出る幕を失い,地に落ちた。聖なる信仰の本は没落し,僕におよぼす力を失った。(Die Kreuze an der Wand schrumpften, die Gottesgespenster hielten still wie geschlagen, (...) alle Engel und Moses hatten ausgespielt oder waren gefallen, die heiligen und schwarzen Schriften versunken, ohne Macht über mich, S.112f.)

朝の鐘で少年を打ちのめした教会権力が,今では反対に打ちのめされている。両者の立場は完全に逆転したのだ。解き放たれた少年の空想はベルンの競技場へと飛翔する。彼は

ドイツチームの一員となり、芝生の上を縦横無尽に走り回っている。それは少年が自分の心と体を取り戻した瞬間だった。

## 理性の孤独と没落

実況放送の終了とともに、少年は家を飛び出す。彼は「世界中を抱きしめたい」(bereit, die ganze Welt zu umarmen, S.120)気持ちでいっぱいだ。ドイツの勝利とともに「僕は世界チャンピオンになった」(ich war zum Weltmeister geworden, S.115.)のだ。それどころか、彼は「だれよりも幸福であり、もしかしたらヴェルナー・リープリヒやフリッツ・ヴァルターよりも幸福だった」(war ich (...) der glücklichste von allen, glücklicher vielleicht als Werner Liebrich oder Fritz Walter. S.120)と告白する。だが応援するチームとの一体感だけでは、選手よりも幸福になることはできないだろう。そもそも「世界チャンピオン」(Weltmeister)とは「世界を制御する」(Welt meistern)者に他ならない。つまり「僕は世界チャンピオンになった」という宣言には、神＝父からの独立をとげた主権者＝理性の喜びが込められている。この思想上の業績がハンガリーを打ち倒したドイツチームの勝利と重ね合わされているのだろう。少年は喜びに舞い上がらんばかりだ。ところが村は奇妙な静けさに包まれている。

これだけの大事件にもかかわらず、ひとつ子ひとり姿がなかった。(…)世界チャンピオンになったのに、あたかも何ひとつ変わってはいないかのようであり、ちょうどこのとき、だれかが村に魔法をかけて時間を止めたようであり、あるいは僕が勝利した瞬間に村人たちは永遠に僕から遠ざけられたかのようだった。(bei dieser Sensation, ließ sich kein Mensch blicken. (...) Alles war so, als hätte sich nichts verändert mit der Weltmeisterschaft, als hätte ausgerechnet jetzt jemand das Dorf verwunschen und stillgestellt oder als hätten sich, im Augenblick meines Triumphs, die Menschen im Dorf für immer von mir getrennt. S.118f.)

この場面は自由な世界に投げ出された存在の不安を示唆しているのではないだろうか。神の死を告げるニーチェのアフォリズムでは、方向性を失くした世界の空虚が描かれている。<sup>14)</sup> ここで少年は絶対的権威が崩壊した直後の空白にさらされているのだ。それは孤独な実存的経験である。ベルンの出来事は神の退位を意味する「大事件」だった。ところが村人たちは、この事態に気づいていない。彼らには、いつもと同じ長閑な日曜日だったの

だ。だから「僕が勝利した瞬間に村人たちは永遠に僕から遠ざけられた」のだろう。村に人影はなく、あたりは静まり返っている。それは神なき世界に投げ出された少年の心象風景に他ならない。

だが、この空白も長くは続かない。おそらく夕食時には牧師館はいつもの秩序を取りもどしているだろう。明日になれば、少年もいつものようにギムナジウムに通うはずだ。<sup>15)</sup> しかし、彼の中では理性が芽生えている。それでは、その歩みは啓蒙期の思想家たちが夢見たような輝きに満ちているのだろうか。神から解放された今、むしろ理性は欲望の下僕へと落ちていくのではないだろうか。すばらしい幸福感で満たされた物語の最後に、そのような重い予感を与える場面を作者は挿入している。たとえばベルンからの生放送は表彰式で「世界に冠たるドイツ」(Deutschland über alles, S.116)というナチス時代の国歌を叫び、「ハイル」(Heil! S.116)と怒鳴る観衆の声を伝える。ドイツチームもハンガリー側の観客席へと走りより「ドイツの戦争植民地に挨拶し」(die deutsche Schlachtenkolonie begrüßen, S.114), 「あたかも城塞を攻略したかのようにふるまう」([die Spieler] gebärden sich, als ob sie ein Schloß gewonnen hätten. S.115)。それをラジオで聴いた少年も、村の若者たちが勝利に酔い千鳥足でふらつく様子を目にする。彼らはワールドカップによって、先の敗戦の屈辱を雪いでいるかのようなようだ。これに続くドイツの経済成長も敗戦の屈辱を梃子としていなかったと、だれが言えるだろう。これらの醜悪な場面には、もはや山の上から恍惚として村を眺めた端正な理性の姿はない。理性の幸福は、かくも早く過ぎ去るのだ。

ドイツチームが世界チャンピオンになった日曜日。それは少年の独立記念日でもあった。その独立への道のりには、神をめぐる文化史が高い密度で集約されていた。彼の心象風景には壮大な思想史のドラマが映じていたのである。

---

本論は日本独文学会中国四国支部研究発表会（2009年11月21日、香川大学）で口頭発表した原稿に加筆したものである。使用するテキストは次の通り。Friedrich Christian Delius: *Der Sonntag, an dem ich Weltmeister wurde*. Reinbeck (Rowohlt) 1996/2004. (Neuausgabe)

<sup>1)</sup> 1994年6月のワールドカップ・アメリカ大会の直前に「期日どおり」(termingerecht)に出版されたこの本は流行狙いとまで解された。Peter Michalzik: Unentschieden. Friedrich Christian Delius spielt Fußball. In: *Süddeutsche Zeitung*, 17.3.1994. Zitat aus Axel Viereg: Zur Erzählweise von Delius in *Der Sonntag, an dem ich Weltmeister wurde*. In: Manfred Durzak, Hartmut Steinecke(Hrsg.): *F.C.Delius. Studien über sein literarisches Werk*. Staufenberg Verlag, Tübingen, 1997. S.143-162, hier S.143f. これは曲解であるとしても、その後の解釈も次の書評が示す枠内にあったといえるだろう。「これはサッカーの本ではない。もしかしたら父祖の権威や言葉による抑圧と解放についての本であり、50年代のヘッセン州の村生活や戦後期について

---

の本であり、東西国境線の影の下での子供の成長や思春期の憧れと不安についての本である。」 Hannes Krauss: Bilder eines Sonntags. In: Freitag, 18.3.1994. <http://www.fcdelius.de/buecher/sonntag.html>. (2011年3月25日現在)

<sup>2)</sup> たとえばベルの作品は社会状況との関連のみで解釈される傾向が強く、そのため作品の射程が実際よりも狭く見積もられてきた。次の論文を参照のこと。拙論：文学はごみである、ベルにおけるフモールの概念をめぐって [広島ドイツ文学会編『広島ドイツ文学』第23号, 2009, 87-98頁]

<sup>3)</sup> ヘッセン州のヴェアダ村はDDRとの国境に近い。そのため主人公の少年は次のように語る。「すぐ近くの山々の向うには悪の帝国が待ち構えていた。(…)しかし、アメリカ人たちが僕の住む世界の中心点を守っていた。」 (gleich hinter den nächsten Bergen lauerte das Reich des Bösen, (...) Aber die Amerikaner schützten meine Mitte, S.38)

<sup>4)</sup> 本論の最終節で示すように、テキストにはドイツの勝利に歓喜する観衆がベルンのスタジアムでナチス時代の国歌を歌い、「ハイル」と叫ぶ場面が描かれている。次の論考を参照のこと。「(この作品では)ドイツ人にとって、まだ遠い彼方とはいえないナチスの過去がいくつかの文章において見て取れるだろう。語り手は語りの流れの中にこれらの文章をつねに巧みに挿入するすべを心得ているのだ。」 Reinhard Wilczek: Autobiografisches Erzählen als innere Geschichtsschreibung. In: Deutschunterricht. Zeitschrift für Erziehungs- und Bildungsaufgaben des Deutschunterrichts. 4 / 2002. S.28-31, hier S.31.

<sup>5)</sup> 次の論考を参照のこと。ハインツ・シュラップファー (和泉雅人, 安川晴基訳): ドイツ文学の短い歴史 (同学社) 2008, 80-108頁。

<sup>6)</sup> 作者デーリウスはヴェアダ村の牧師の息子であり、この作品の自伝的性格について何度も語っている。次のインタビューでの発言を参照のこと。「私はこの本で、自分が家庭の中でどのように成長したのかを十分にはっきりと描きました。」 Keith Bullivant: “Das könnte dein Schreiben sein.” Gespräch mit Friedrich Christian Delius. In: Manfred Durzak, Hartmut Steinecke(Hrsg.): F.C.Delius. A.a.O. S.225-241, hier S.233.

<sup>7)</sup> 次の論考を参照のこと。「(物語の最後に示される少年の) 幸福な気分や英雄崇拜は若い主人公の欲求に応えているだけではない。それはワールドカップで思わぬ優勝をとげて〈俺たちも何がしかの者だ〉という気持ちを強くした、奇跡の経済復興期の西ドイツ市民の精神を象徴してもいるのだ。」 Torsten Pflugmacher: Was ist es, das in uns stürmt und drängt? Themen- und Motiggeflecht in Friedrich Christian Delius' Erzählung Der Sonntag, an dem ich Weltmeister wurde. In: Praxis Deutsch. 196. 2006. S.52-55, hier S.52.

<sup>8)</sup> この物語の展開は、生物学における「個体発生は系統発生を繰り返す」という主張を想起させる。人間の胎児には一時期、かつての尾の痕跡が認められるという。つまり動物の個体の発生は、その種の進化の過程をなぞるように推移するのだ。これと同様に少年の精神的成長も、思想史の展開をその初期から現在までたどっていくのである。

<sup>9)</sup> Johann Wolfgang Goethe: Gedichte. Stuttgart (Reclam) 1967/1989. S.162.

<sup>10)</sup> マックス・ヴェーバー (大塚久雄訳): プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神 (岩波文庫) 1989, 18頁。

<sup>11)</sup> Hermann Hesse: Über das Wort Brot. In: Derselbe: Gesammelte Werke in zwölf Bänden. F.a.M. (Suhrkamp) 1970. Bd.11. S.283-286.

<sup>12)</sup> リッターによれば、登山による美的自然の発見は近代の幕開けを特徴付ける出来事だった。Joachim Ritter: Landschaft. Zur Funktion des Ästhetischen in der modernen Gesellschaft. In: Derselbe: Subjektivität. Sechs Aufsätze. F.a.M (Suhrkamp) 1980. S.141-163, hier S.141ff. また「ヨーロッパの近代はモンブラン初登頂に始まる」と主張する次の論考も参照のこと。柏瀬祐之: ヒト、山に登る (白水社) 1999年。42頁。

<sup>13)</sup> Johann Wolfgang Goethe: Faust. Erster und zweiter Teil. München (dtv) 1977. S.335

<sup>14)</sup> ニーチェ『愉しい知識』125番のエッセイを参照のこと。「俺たちはどこへと動いていくのか。すべての太陽から離れていくのか。たえず落ちていくのではないのか。後ろへ、横へ、前へ、あらゆる方向へと。まだ上や下があるのだろうか。」 Friedrich Nietzsche: Kritische Studienausgabe. Hrsg.v. Giorgio Colli und Mazzino Montinari. Berlin / New York (dtv) 1988. Bd.3. S.481.

<sup>15)</sup> 次の論考を参照のこと。「牧師館では、この日曜の晩もいつもと同じように流れていくだろう。これほど熱狂している瞬間にも、少年自身は後で家族一緒に食事をするときには、この勝利もやっと半分程度の価値しかないということ意識しているのだ。」 Theo Herold: Friedrich Christian Delius. Der Sonntag, an dem ich Weltmeister wurde. Berlin (Cornelsen) 2006. S.15.

Delius' *Der Sonntag, an dem ich Weltmeister wurde*

Zur Befreiungsgeschichte eines Pfarrersohns aus dem Gotteskäfing

Shin KIMOTO

F.C.Delius stellte für die deutsche Leserschaft lange den Autor der Trilogie über der Deutschen Herbst dar. Es ist darum nicht schwer zu verstehen, dass sein neues Buch, *Der Sonntag, an dem ich Weltmeister wurde* (1994), anfangs in Rezensionen ausschließlich als Dokument der Nachkriegszeit aufgefasst wurde. Die noch nicht ganz zurückliegende nationalsozialistische Vergangenheit, die Lebenswelt der Adenauer-Ära, die Jugend im Schatten der Zonengrenze usw. klingen zwar im Text an. Man ist jedoch in diesen Rezensionen zu kurzichtig, um zu merken, dass es sich hier um eine Grundfrage der deutschen Literatur handelt: Die Geburt der deutschen Literatur der Moderne verdankt sich nämlich vor allem dem Protestantismus, wie Heinz Schlaffer in seinem Buch, *Die kurze Geschichte der deutschen Literatur*, resümiert. Ihm zufolge wurde die deutsche Literatur der Moderne hauptsächlich von Pastorensöhnen von Lessing über die Gebrüder Schlegel bis Nietzsche geschaffen, so dass sie unvermeidlich in der gespannten Beziehung zur Gottesproblematik steht. Delius beweist in dieser autobiografischen Erzählung, dass auch er sich dieser quasi literarisch-religiösen Tradition anschließt. Der Held der Erzählung ist ein elfjähriger Junge im hessischen Dorf Wehrda, dem der Autor wirklich entstammt. Die Handlung umfasst seine Erlebnisse am 4. Juli 1954, an dem Deutschland die Fußball-Weltmeisterschaft in Bern gewann. Der Text ist aus der Perspektive des Jungen als eines Ich-Erzählers gefasst. Er ist der Älteste von vier Kindern im Pfarrhaus. Der Pfarrer-Vater verkörpert für ihn genau die Zehn Gebote. Wer wirklich regiert, ist jedoch dem Erzähler zufolge „jener bärtige Vater über dem Vater“. Dem allmächtigen Gott fühlt sich der Elfjährige hilflos ausgeliefert. Im Text wird der religiös geregelte Tagesablauf detailliert beschrieben. Zu Beginn der Handlung wird der Junge früh am Morgen von den Kirchenglocken geweckt. Diese wirken in der Schilderung des Erzählers fast wie Folterinstrumente. Auch beim Frühstück geht es nicht um den sinnlichen Genuss, sondern um den Dank für die Gaben Gottes. Er träumt sich spontan in eine Plantagenwelt hinein und wünscht sich eine Mahlzeit, die einmal nicht mit göttlicher Gnade vergiftet wird. Die südliche Hemisphäre ist jedoch zu weit entfernt. Während der Mittagsruhe der Eltern steigt er darum allein

auf einen kleinen Hügel, auch um sich noch die Zeit bis Anpfiff des Endspiels in Bern zu zerstreuen. Mit dem Aufstieg wächst ihm das Glück, „auf das Haus der Vorschriften hinabzuschauen“ und „die kleine Welt da unten mit eigenen Augen zu ordnen“. Diese optische Erfahrung aus der Höhe ist so typisch für moderne Subjektivität, dass nach Joachim Ritter Petrarcas Bergbesteigung den Beginn der Moderne kennzeichnet. In dieser Hügel-Szene wacht also im Jungen die Vernunft, mit der er die Befreiung aus dem Gotteskäfig durchsetzen will. Dazu hilft noch die Radioübertragung aus Bern, der er allein im Arbeitszimmer des Vaters zuhören darf. Dabei fällt ihm sofort das religiöse Vokabular des Reporters auf, der z.B. den Torwart „Fußballgott“ nennt. Die Übertragung stellt für den Pfarrersohn vor allem einen „unerhörten Gottesdienst“ dar, der ihm „das Glück, einmal ungebremst Ja! sagen zu können“, verschafft. Die Teilnahme an der Schwärmerei im Stadion kann jedoch wohl auch den Untergang der Vernunft zum bloßen Instrument andeuten.